

1 事業名 青少年教育指導者ミーティング

2 必要性

独立行政法人国立青少年教育振興機構の中期計画（平成 23 年 6 月）に「青少年をめぐる諸課題への円滑な対応を図るため、青少年教育に関する国内外の関係機関・団体等との連携を促進し、関係機関等とのネットワークを構築する」とある。ここで、青少年教育関係機関・団体等の全国的なネットワークづくりや地域のネットワークづくりを推進する方策が示されている。

本事業は、担当施設で取り組んでいる体験活動を参加者全員で体験することを通して、各施設のプログラム開発・実践に活かしたり、当施設が先導的モデル的事業等を実施した成果を公立青少年教育施設・青少年団体等に普及させたりすることを主たる目的とした事業である。将来的にも、国立青少年教育振興機構の施設として積極的に取り組むべき事業である。

3 趣旨

山陰地区の青少年教育施設・青少年教育団体に所属し、事業を企画・運営している担当者が集まり、企画事業に関する情報・ノウハウなどの情報交換を行う中で、お互いの事業について理解し、企画運営に関する学びを深める。

4 協力

鳥取県教育委員会家庭・地域教育課，島根県教育庁社会教育課，島根大学教育学部附属教育支援センター，鳥取県立船上山少年自然の家，鳥取県立大山青年の家，島根県立青少年の家（サン・レイク），島根県立少年自然の家

5 期日 平成 26 年 5 月 26 日（月）～平成 26 年 5 月 27 日（火）

（会場 国立三瓶青少年交流の家）

6 参加者

（1）募集対象・人数

山陰地区にある青少年教育施設等で青少年教育に携わり、事業の企画・運営に関わっている職員 10 名程度

（2）参加人数

10 名（島根県 8 名，鳥取県 2 名）

7 参加経費

4,180 円（食事代 980 円，シーツ代 200 円，情報交換会費 3,000 円）

8 事業の内容

（1）事業の特色

この事業は、平成 20 年度より、公立青少年教育施設・青少年団体等との連絡協力促進事業「青少年教育指導者ミーティング in SANBE」としてスタートし、当施設で、5 月と 2 月の年



2 回開催してきた。その後、参加者から「他施設の活動プログラムも体験したい」という意見が多く出たため、平成 21 年度からは年 2 回開催のうち、1 回目は当施設以外の施設の持ち回りで、2 回目は当施設で開催することになった。さらに平成 22 年度からは、鳥取県内の青少年教育施設（鳥取県立船上山少年自然の家、鳥取県立大山青年の家）も含む、全 5 施設で開催することとなり、各施設を一巡して現在に至る。

しかしながら、平成 24 年度の第 2 回は、各施設とも事業や業務多忙のため参加者が集まらず、実施しても事業の成果が期待できないと判断したためやむなく中止とした。

このような経緯から、平成 25 年度開催時に各施設へ、今後の開催の方向性についてのアンケートを行った。意見集約の結果、8 団体中回答のあった 6 団体のうち、4 団体から年 1 回の開催希望があった。

これを受け、当施設で検討したところ、対象 5 施設を一巡していること、冬季のプログラムは各施設の地域特性に大きく左右されること、冬季は出席者数が限られることなどから、平成 26 年度から年 1 回 5～6 月に行うという方向性を得た。

さらに、本事業の趣旨についても以下に挙げるとおり再確認した。

趣旨① それぞれの施設の特性を生かしたプログラムを実際に体験することによって、各施設で活かせる手法を学ぶ。

趣旨② 5 施設が集まる意義を勘案し、共催できるようなプログラムを構築したり、新規プログラムの案を出し合ったり、安全管理に関する演習を行ったりする。

前回（H26 年 2 月 12 日～13 日開催）は、①の趣旨から S A P（三瓶アドベンチャープログラム）を体験するとともに、②の趣旨から、5 施設連携事業の立案（ワークショップ）を行い、事業の骨子をまとめた。（参考資料 前回のワークショップのまとめ）

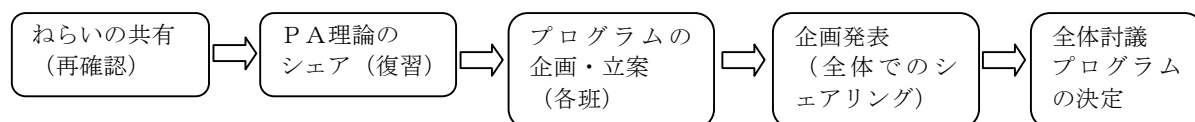
そして、今回は開催に向けて具体的な討議を進めていくという方向性を確認した。

今回は、これを受けて、「施設連携事業」についてさらに討議を重ね、実現を目指して具体的な活動計画を立案することを主目的として開催した。

具体的には、参考資料の A 部会「大人のアドベンチャーキャンプ」（仮題）について討議し、プログラムの具体と活動計画を立案することとした。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

話し合いのプロセスは以下のとおりである。



その際、参加者一人ひとりの考えをできるだけ引き出すために、少人数（4 名程度）班でのワークショップ形式を採用した。同じテーマの下に、各班が討議し、違うアプローチで事業のねらいを達成するための活動計画の具体を作成することとした。

(3) 広報のポイント

山陰地区の 5 施設すべてから参加が得られるように、施設毎に担当者を配置し、本事業の趣旨についての共通理解を図り、日程や内容についての調整をした。また、多数の参加を得られるように青少年教育施設だけでなく、島根・鳥取両県の教育委員会や大学にも広報した。

(4) 日程表

(会場 三瓶青少年交流の家)

5/2 6 (月)	13:30 13:45 14:00 17:00 18:30 22:00 22:30													
				・開 講 式 OR	[オープニング] ・ねらいの共有 ・アイスブレイク	[研修①] 施設連携事業の立案 ※前回の話し合い (A 部会) の内容をさらに煮詰める			入浴・休憩	情報交換会 (夕食代含む)		就寝準備	就寝	
5/2 7 (火)	6:30 7:40 9:00 12:00 13:00 13:30 14:00													
	起床	朝食	退所点検	[研修②] 施設連携事業の立案 ※前日に引き続き討議			昼食	まとめ ・ふりかえり ・これからの予定の確認			閉講式	解散		

(5) 運営のポイント

ワークショップでは、各班での討議が円滑に進行するように、かつ、全体でのシェアリングがしやすいようにワークシート（１・２・３）を用いた。

また、参加者同士が、運営する事業や指導方法等について気軽に情報交換し、かつ親睦が図れるように情報交換会を設定した。

ワークシート 1

(6) 安全管理のポイント

今回は、ディスカッションが主な内容であるため、特に危険を伴う活動はなかったが、入所時のオリエンテーションにおいて、体調管理、緊急時の対応、危険な動植物への対応等参加者に周知した。

ワークシート 2

(7) アンケートの満足度・おもな記述

満足度（参加者 10 名）

満足 10 名（100％） やや満足 0 名（0％）

やや不満 0 名（0％） 不満 0 名（0％）

- ・他施設の職員の方とも交流ができ、新たなネットワーク作りができたと思う。今後も積極的に関わり、施設運営に役立てていきたい。
- ・皆さんで話し合ったことが形になっていき非常に充実していた。たくさんの意見が聞けて参考になりました。

- ・PA理論は、アドラー心理学やコーチングの理論にも近いのかな、と思いました。意見を受け止めてもらえる雰囲気があったので、PAについて不勉強ながらも、感じたことや考えたことが言えたように思います。
- ・若手の教員は、学校の中で意見を出しにくい現状があるので、管理職や年配の先生方を対象にした研修もしてほしいです。

ワークシート 3

- ・子どもの教育について、気づいたことを語り合える職場であれば、子どもたちも同じように主体的に育っていけると思います。
- ・P Aという柱を持って、事業のねらいや活動内容の検討が行えたことは、大変有意義だと感じました。持ち帰って、当所のプログラムの立案に生かしたいと思います。また、今後さらに研修を深めたいという意欲をいただきました。ありがとうございました。



- ・P A理論について、ほとんど知らなかったことが少し分かりよかったです。もっと詳しく自分が勉強したいと思いました。
- ・いろいろな施設の方と情報交換ができてよかったです。
- ・初めて参加させていただきありがとうございました。本事業に参加された皆様の事前の学習（P A理論についてなど）、懇親会での情報交換意欲・具体的な姿をイメージした討議（研修）、それらいずれも参考になりました。学生たちの指導に生かしていきたいと思います。
- ・5 施設の連携ということであるが、所長レベルでの話し合い・共通理解がどこまでできているのか不安が残っています。直接所長レベルでの事業打合せがあってもよいのではないのでしょうか。
- ・P A理論の研修が、毎年異動があることを考えると、随時必要になってくると思います。
- ・今回を振り返ると、非常に時間的には厳しいのですが、実際にS A Pを体験し、持ち帰ることができたらと思いました。

10 成果と今後の課題

<成果>

①ワーキングネットワークの構築

「施設連携事業」実施に向けての具体的な活動プログラムの協議や夜の情報交換等を通して参加者同士の親交を深めることができた。今後、連携事業を進めていくワーキングネットワークを構築することができた。

②施設連携事業の実現へ向けての具体的な活動案の作成

施設連携事業（教員を対象としたP A理論に基づく学級集団づくり研修）の具体的な活動計画を作成することができた。これを基に、各施設間で調整を図り、今年度中の事業の実現に向けて動いていくことで、ますます施設間同士のつながりが強くなると考える。

<今後の課題>

青少年指導者ミーティングも、「国立三瓶青少年交流の家→鳥取県立船上山少年自然の家→島根県立少年自然の家→鳥取県立大山青年の家→島根県立青少年の家（サン・レイク）」と対象5施設を一巡した。

これまでは、先に述べた本事業の趣旨①を中心とした内容で事業を展開してきたが、今後は趣旨②に挙げた「施設共催事業」の実施を中心とした内容で実施し、国立の青少年教育施設としての使命を果たしていきたいと考える。「体験の風をおこそう」運動推進のためには、公立社会教育施設との連携は不可欠であり、今後はこの「施設連携事業」を地域ぐるみで「体験の風をおこそう」事業へと発展させるべく協議を重ねていきたい。そのためには、益々の連携協

力が必要となるため、限られた時間でより効率的な協議ができるようにするとともに、継続的な取組がなされるよう、各施設でのきちんとした引き継ぎがなされるよう配慮したい。

11 普及計画・普及実績

山陰地方の青少年教育施設の指導系職員に対し、直接、開催施設の活動プログラムなどについて広報することができた。

成果については当施設ホームページで紹介する。また、事業報告書を作成し、青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し成果の普及を図る。

(担当：企画指導専門職 荒金 岳登)